

【翻刻・解題】 山陰歴史館蔵『和歌雑集』 『和歌長行』

渡邊 健

概要

米子市立山陰歴史館が所蔵する鹿島恒勇家旧蔵の和歌資料の中から、『和歌雑集』と『和歌長行』の二つを翻刻、紹介する。^(注1)これらは、近世後期に米子の豪商として栄えた鹿島家(鹿島本家)の九代・鹿島長行^(注2)が嘉永六年(一八五三)から安政二、三年(一八五五、六)年頃にかけて作成した和歌詠草であり、幕末の鳥取における地方歌人の活動を知る上で有益な資料である。

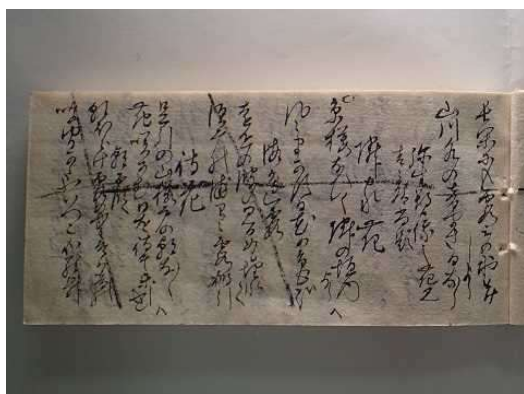
解題

『和歌雑集』

(写真1 表紙)



(写真2 三才)



〔整理番号〕米子市教育委員会整理番号「C1MG0二三七」

〔表紙〕 縦八・〇×一七・六糎 砥粉色の地に代赭色の格子縞

〔外題〕 表紙中央に「和歌雑集」と直書

〔体裁〕 横本 美濃三つ切りよりやや小さいくらいの大きさ

楮紙 袋綴写本一冊 紫色角裂あり

〔本文〕 一面一五行 和歌一首二行書き

〔丁数〕 全九二丁 内墨付二六丁

〔構成〕 春・夏・秋・冬・雑の部に分かれ、二〇六首を収める

(重出歌六首を含む)

〔備考〕

春・夏・秋・冬・雑の部に分かれているが、「雑集」という名のように各部の内部は雑然とした歌の配置となっており、季節の推移や主題による整理・分類はなされていない。順不同で各部に該当する歌が数次にわたって書き足されていったような印象を受ける。裏表紙見返しに「嘉永六年の春相改 長行」と記されているが、年次の分かる歌の多くは嘉永六年(一八五三)冬・嘉永七年春の歌であり、「嘉永六年の春」は成立の時期でなく、長行がこの和歌詠草に歌の記録を始めた頃に当たるとは思われないかと思われる。二〇四歌詞書に「鹿島重正が四十の賀に春祝といふ事を」とあるが、長行の親族に当たると下鹿島家三代・鹿島重正は文化一三年(一八一六)生まれのため、その四十の賀は安政二年(一八五五)ということになる。この歌は年次が判明する最も新しい歌であり、本書の成立は安政二年春以降

と考えられる。本書にはまた、所収歌の多くに合点、記号が付されており、長行本人によるものとみられる。歌の上部に山型の記号や、和歌本文に抹消線や大きな○印が施されているのはその歌の除棄を示すと思われる。

『和歌 長行』

〔整理番号〕米子市教育委員会整理番号「C1MG〇二二六」

〔表紙〕縦八・〇×一七・五糎 砥粉色の地に代赭色の格子縞

〔外題〕表紙中央に「和歌」と直書 表紙左下に「長行」と記す

〔体裁〕横本 美濃三つ切りよりやや小さいくらい大きさ

楮紙 袋綴写本一冊 紫色角裂あり

〔本文〕一面三〜二行 和歌一首二〜三行書き

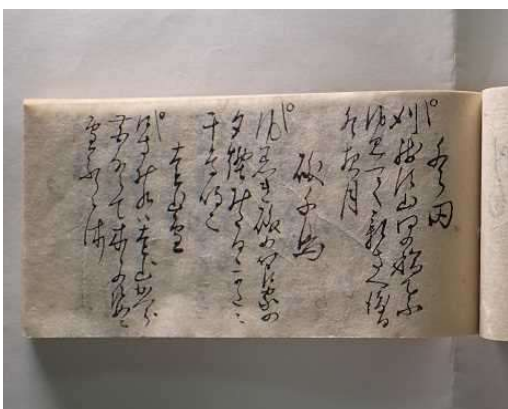
〔丁数〕全九七丁 内墨付四五丁

〔構成〕春・夏・秋・冬・雑の部に分かれ、一七二首を取める

(ただし、春・夏・秋部は冒頭にその記載を欠く)

〔写真3 表紙〕

〔写真4 六九才〕



〔備考〕

先掲の『和歌雑集』とは丁数に違いがあるものの体裁が同一であり、同

じ折に作成された本と考えられる。両書とも簡便な横本であり、詠歌の記録・整理用の草稿として使用されていたのではないだろうか。両書を比較すると一四三首が共通し、密接な関係を有することは明らかであるが、『和歌 長行』の方は各部の内部で歌が季節の推移や主題により整理されており、歌に付された合点・記号類も少なく、歌の除棄を示す抹消線なども施されていない。『和歌 長行』は『和歌雑集』を整理・増補して成った改訂本と位置づけて誤りないだろう。その成立の時期であるが、年次の判明する最も新しい歌として、本書の八一歌の詞書に「卯 八月十五夜実成寺御歌会に 月」とある。「卯」は安政二年（一八五五、乙卯）をさすとみられ、同年秋以降ということになる。一方で本書は、鹿島長行が安政四年刊『採風集』二編に投稿する際に作成した『採風集二編料』の直接の依拠資料となっており、その関係から考えると、おそらく安政三年中までには成ったのではないかと考えられる。

なお、今回翻刻・紹介した『和歌雑集』『和歌 長行』については、注3 拙稿において、書物の内容・構成や成立時期だけでなく、これら二書を含め鹿島長行が同時期に作成した和歌詠草四種の相互関係についても考察・言及している。本稿と併せ参照していただきたい。

注

(1) 『和歌雑集』『和歌 長行』については、原豊二氏が「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」(『山陰研究』第三号、平成二二年一二月)の中で書誌を紹介されており、今回参考にさせていただいた。

(2) 鹿島長行については、拙稿『研究ノート』山陰歴史館蔵『無題歌合集』について(『山陰研究』第二二号、令和元年一二月)に詳述したので、説明はそちらを参照されたい。

(3) 拙稿『研究ノート』鹿島長行の和歌詠草四種について(『山陰研究』第一四号、令和三年一二月)。

【翻刻 『和歌雑集』 『和歌 長行』】

凡例

- 一 底本には、いずれも山陰歴史館蔵本（鹿島家旧蔵）を用いた。
- 二 翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。
 - 1 和歌はすべて一行書きとし、歌頭に算用数字で通し番号を付した。
 - 2 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した。
 - 3 仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「ママ」と傍記した。
 - 4 漢字の表記は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「嶋・浪・湊」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。
 - 5 読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（ ）を付し、平仮名で読みを施した。
 - 6 繰り返し記号「ゞ」「ゞゞ」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ゞ」「ゞゞ」で表記した。
 - 7 底本には多くの書き入れや訂正があるが、合点や記号類は表示が煩雑になることを避けるために、次頁に一覧表で示すこととした。見せ消し・挿入等による語句訂正の状況はなるべく翻刻に反映させるか、「校訂付記」でそれに言及するようにした。書き入れには朱筆のものもあるが、ここでは黒・朱の区別をしていない。見せ消しは底本では訂正する語句に抹消線を施し、訂正後の文字を本文よりやや小さく傍記しているが、本稿では見せ消し部分はすべて二重抹消線で示した。また、語句の挿入の指示は「」を付けて示した。
 - 8 翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。
 - 9 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。
 - 10 丁付は、各丁の終わりに「」を付し、その下の括弧内に丁数と表裏（オ・ウ）を記した。
 - 三 次頁には『和歌雑集』『和歌 長行』の底本に見られる合点や記号類、除棄の表示などの状況を一覧表で示した。
 - ・「歌上」欄 歌の上部に山型の記号が付されているものを「△」で表示した。ただし、「△」が大きく数首にわたって付されている場合も、表では一まずつの場合と区別していない。また、歌の上部左側に「△」の記号が付されているものも、ここに表示した。
 - ・「歌頭」欄 歌の右肩に付された、評価を示すと見られる合点を「へ」、白丸印を「○」、黒丸印を「●」で表示した。
 - ・「歌下」欄 歌の下部に付された小さな山型の記号を「▽」、三角は「△」、丸は「○」で表示した。記号に抹消線が施されている場合はそれも示した。
 - ・「除棄」欄 歌に大きく横線や斜線が引かれているものは、横線だけの場合は「/」、横線と斜線で消している場合は「×」と表示した。ただし、それらの線が大きく数首にわたって引かれている場合も、表では一まずつの場合と区別していない。また、歌の途中に大きな丸印を付してその歌の除棄を示しているものは「○」で表示した。
 - 四 本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻の掲載をご許可いただいた米子市立山陰歴史館に深謝申し上げます。

なお本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号20K00359 代表・渡邊健）、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二二年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。

和歌雑集

野邊花

〔1ウ〕

10 嵐吹く木末は花の色消えてつら／＼かをる旅の袖哉

山家花

11 さくら戸にたつや霞を吹き分けて都に送る花の下風

春旅

12 此のごろの旅にも馴れて花の香の袂にあまる春の山道

滝邊花

13 水上は雲に埋めるしら瀧のいともて結ぶ山桜かな

蛙

14 春雨にみどり深むる沢の辺の若草隠れ蛙なく也

三月尽

15 山吹のやつれがちなる我が庵は春も小蝶の夢と暮れにき

春色浮水

16 あつ氷霞のひまにとけしより山下水の音けぶる也

同

17 山川に氷ながるゝ此の頃の水にも春の色は見えけり

同

18 長閑にも霞みの氷とけしより山川水の音まさるなり

弥生朔日俄に花見 青々庵 当題

隣家花

19 糸桜なびく隣の垣内より風にまかする花の色哉

海邊霞

20 遠近の波の見るめも埋もれて須磨の浦わに霞棚引く

待花

〔2ウ〕

和歌雑集

春部

〔表紙〕
〔遊紙〕

早春

1 久かたの空のみどりも啼く鶴声にとゝなふ春の曙

若菜

2 山／＼の霞の衣春くれば軒ば放れて若菜摘む也

山家鶯

3 谷の戸も春は来にけり梅が香に初音をこぼす軒の鶯

夜春雨

4 庭の面の月は朧に照りながら濡るゝを見れば春雨ぞ降る

〔1オ〕

残雪

5 花咲ける草の庵はのどけきをいまも残れる跡の白雪

同

6 松の戸も此のごろ匂ふ花の香にけたれて残る峰の白雪

川邊柳

7 山川の氷ながれて朧夜の月にけぶれる青柳の糸

帰雁

8 久かたの雲井にみてる浪の上に名残も霞む雁の声かな

春旅

9 旅衣袂もおもる春雨に蕨や摘まむ山の下道

〔2オ〕

- 21 足引の山桜戸の朝なく花咲かむ日を待つぞ楽しき
朝霞
- 22 朝ぼらけ霞の中に鳥が音の聞こゆるかたやいづこ成るらむ
雪中若菜
「(3才)
- 23 山影のやゝもえ初むる雪間より色萌え出でし若菜摘みてん
田家梅
- 24 朝風に畑やく烟結ぼられ梅が香寒し小山田の里
同
- 25 山田守る庵のみぎりの真柴垣ほに出でて匂ふ梅も有りけり
花
- 26 打ちわたす峯の横雲いつしかと別るゝ見れば花咲きにけり
立春
「(3ウ)
- 27 曙の雲みをかける鶴音に千とせの春もひゞきそめつゝ
雪中若菜
- 28 こゝろ^あ粧^あてにけふは尋ねて雪ながら野々邊の若菜誰かつむらん
海上霞
- 29 わたつみの沖吹く風も隙見えて霞にしづむ浪の色かな
春曙
- 30 雲かげの花かと思えし山のはの霞もにほふ春の明けほの
立春
「(4才)
- 31 春きぬとにほふ霞の山眉に朝げのけぶり立ちそめにけり
遠山花
- 32 白雲の外山の桜咲きぬらむ此のころ薫る窓のあけぐれ
立春
- 33 吹きなびく雲の袖より明けそめて四方の山なみ春や立つらん
海上霞
「(4ウ)
- 34 海士舟の行くへをしたふ風見えて沖の霞も打ちなびきつゝ
(以下十五丁「5才」19ウ) 本文なし)
- 35 吹きはらふ小ぎゝの風に露更けて月の行くへに飛ぶほたるかな
田家夏
夏部
螢
- 36 夕立の過ぎ行く小田のあし垣にたゞよふ風も涼しかりけり
水鶏
- 37 小雨降る野河の岸の夕まぐれ水草隠れに水鶏なく也
早苗露
- 38 植ゑはてし小田の早苗を見るが内にみどりの露ぞ吹き渡しけり
五月雨
「(20才)
- 39 雲かゝる岡の松原風絶えて日かげもゆらぐ五月雨ぞ降る
水鶏
- 40 雨さそふ軒の松風たゆむまも水鶏鳴く夜はえこそねられね
五月雨晴
- 41 うき雲の絶え間も見へて五月雨の晴れ行くかたにけぶり立つなり
田家夏
- 42 木がくれの山下清水いつしかと夏のひまもる音ぞ涼しき

田上夏月

「(20ウ)

43 山松のすけきをもるゝ月かげに早田の水も秋の色せり

稻妻

44 我が門の浅茅が露のたまゝに宿るもはかな稻妻の影

田上霧

45 かきつ田の稲葉のほのへ霧こめてみせきの水の音むせぶ也

秋に出也

「(21オ)

「(21ウ)

(以下十六丁「22オ」37ウ」本文なし)

秋部

霧中鹿声

46 霧深き山田のひたのひたすらに哀れをこめて小鹿鳴く也

薦

47 雨はれし軒ばの松の音絶えて夕日に溢す薦紅者かな

月

48 うき雲は松の木末に晴れにけりのどかに月の入るかたや見ん

きりぐす

49 物おもふ霜夜の窓に月更けて身にしむばかりなくきりぐす

「(38オ)

同

50 きりぐす鳴く音さびしき夕暮に小野々笹原小雨ふる也

擣衣

51 紅葉ちる片山影は霧こめて誰が里なれや衣うつこゑ

菊露

52 きふけふ垣内に咲ける白菊の匂ひも深き露の色かな

同

53 朝戸出の垣根に咲ける菊の花手折れば袖に露やこぼれん

「(38ウ)

同

54 露結ぶ籬の菊の花の色をやつしもはてぬ庭のまり垣

擣衣

55 小夜更けて袖しぼれとや閨寒き枕の山に衣うつらん

雨中聞擣衣

56 手弱女が打つや砧の音す也雨のこゑさへたえぐにして

初秋月

57 山の邊の松の葉越しの薄霧に秋めきわたる三日月のかげ

「(39オ)

萩

58 秋萩の花の中道分け入れば袂にほふ露の色かな

同

59 小山田のきしの萩原風過ぎて月影ながら露ぞみだるゝ

月前管絃

60 糸竹の声のひゞきに雲はれて影おもしろき秋の夜の月

鹿声何方

61 山深み霧立つ奥の夕ぐれに立ちど定めぬ小男鹿のこゑ

「(39ウ)

雨中雁

62 村雨をつばさにかけて雁がねの声もはるけき朝ぼらけ哉

同

63 うき雲を分け行く雁の翅より折くそぐ雨の音かな

同

64 雨雲をつばさにかけて飛ぶ雁の声もしぐる朝ぼらけ哉

同

65 村雨の音さへ寒き明け方の雲まにまどふ初雁の声

「(40才)

庭菊

66 初霜はおかばおかなん庭の菊秋の咲りは詠めつくしぬ

山家紅葉

67 分けまよふ山ふところの紅葉がり鹿のふしどに宿やもとめん

暮秋

68 浅茅生の露斗なる虫の音もかれぐにこそ秋更けにけり

田上霧

69 かきつ田の稲葉のほのへ霧こめてるせきの水の音むせぶ也

「(40ウ)

(以下十五丁「41才」55ウ」本文なし)

冬部

70 神無月時雨ごとくに散る見えて風に先だつ木々の紅葉

冬遠晴

71 夢にだにまだ見ぬ不二の雪の上に聞もる月は今か照るらん

冬田

72 冬されば見るめもさむき小山田のひつちは霜に結ぼられつゝ

海上雪

73 明石がた浪のうねくこぐ舟の詠めも深き雪の曙

船中霰

74 漕ぎ下す淀川舟の笛ごしに月かげながら霰降る也

雪

75 水枯れしはや「川の」瀬をさし下す筏の上に雪は降りつゝ

同

76 さえ渡る雲間の月を思ひ寝の枕につもる夜半の雪哉

霰

77 山風に霰たばしる此の頃は鳥の鳴く音もくだけのみして

同

「(56ウ)

78 山風に降る音しげき玉霰たまれば消ゆる谷川の水

初雪

79 さえし夜の峯の松風明けぬめり木々の白雪けさは見ゆ蘭

橋上霜

80 ゆふ月の霜の上なる雲影に渡るも寒き山川のはし

海邊雪

81 降りわたす磯べの松の白雪に浪もこもる心地こそすれ

落者

82 雨雲の夕日に染めし色消えてひとりこぼる薄紅者かな

「(57才)

山家冬

83 山里は落者の音も小夜更けて月より外にとふ嵐かな

山家落葉

- 84 吹き越ゆる風を時じみ山里の夢の枕に木のは降る也
冬月
- 85 我が門の木ゝの梢は落者^{ママ}して見る影寒し冬の夜の月
落葉
- 86 人しらぬ遠山影の薄月夜風に交りて木のは散るらん
山家落葉
「(57ウ)
- 87 霜深きみ山がくれの松の戸の落者^{ママ}につれてとふ嵐かな
時雨
- 88 我が門の川邊の柳散りはてゝひとり過ぎ行く夕しぐれかな
時雨落葉
- 89 雲晴るる時雨の跡をきてみれば片山里に木のは降る也
霰
- 90 梢吹く風もさえて池の面の月にみだるゝ玉霰かな
先に有
- 91 小ざゝ原山風ならで降る音の身にしむものは霰也けり
同
「(58オ)
- 92 打ちなびく風の姿もあらはれて雪におきふす軒の村竹
竹雪
海邊雪
- 93 浦風は吹けどふかねど塩釜の煙の上に雪は降りつゝ
冬田
- 94 刈り残す山田の稲ば風見えて影さへ渡る冬の夜の月

- 95 夢覚むる枕の山に風さえて月も身にしむ暁の空
冬暁月
「(58ウ)
- 96 浪さわぐ磯わの千鳥声きえて風の末にさゆる月影
磯千鳥
- 97 吹きかへす風にくだくる荒磯のひまなき浪に千鳥啼く也
同
同
- 98 風荒き磯の苦家の夕烟りみだるゝかたに千鳥鳴く也
遠山雪
- 99 けさ見れば遠山かづら花ならで木ゝの姿に雪ふりにけり
同
- 100 吹き絶えし風の姿と見るばかり遠の高ねにつもる白雪
同
「(59オ)
- 101 降り積もる高ねの雪の静「け」さに桙の松も音せざりけり
山雪
- 102 帯にせる細谷川のおと絶えてみ雪降る也吉備の中山
夕雪
- 103 いざこゝにこま引き留めてはらはまし袖につもれる夕ぐれの雪
同
- 104 雪積もる桙の庵は埋もれて高ねの松に夕日さす也
月前霰
- 105 月にちる影もくだけで石川の早瀬にひゞく玉あられ哉
海邊雪
「(59ウ)
- 106 和田の原降り来る雪に風見えて音すさまじき磯の松原

- 107 埋火
風荒き木々のおとづれ聞く夜はもなれて住みよき埋火の本
鷹狩
- 108 雪晴るる松の木の間に見えにけり今朝の狩場の鳥の落草
同
- 109 村時雨過ぎ行く野邊の狩衣ぬれし袂に夕日さす也
同
- 110 荒鷹のきほふ翅に風見えて羽ぶきもしげき鈴の音ぞする
同 (60才)
- 111 手ばなして雪降る野べにやる鷹のおつる行くへやいづち成るらん
同
- 112 御狩にと降る雪しのぐ鷹人の衣も寒き小野々夕暮
磯千鳥
- 113 風さわぐ荒磯浪のたえぐに声あはれにも鳴く千鳥哉
同
- 114 月さゆる嵐の浪に鳴く千鳥聞くもかなしき梶枕かな
山路雪
- 115 雪深き山路越え行く青馬のいななく声を聞くも寒けし
雪中梅 (60才)
- 116 雪の戸をたたく嵐にかをる也ふるき垣内の梅の初花
山家時雨
- 117 松風の時雨にさわぐ冬の夜は寢覚めのみして明け果てにけり
海上雪
- 118 和田の原漕ぎ出でし舟も見るが内に帆かげかくれて雪になりつゝ
橋上霜 (62才)
- 119 さえ増さる夜はほのぐと明け方に霜置き渡す前の棚はし
雪
- 120 吹きはらふ風もとだへて山のはの日かげあらはにつもる雪哉
初雪 (61才)
- 121 朝ぼらけ雲の上なる大神の嵐の末に初雪ぞふる
遠山雪
- 122 白雲も立ちはなれたる遠方の高根の雪に朝日さすなり
埋火
- 123 いつしかと霜に成りぬる埋火に炭さすほどはしばし寒けし
同
- 124 ひとり守る閨の埋火小夜更けて置く霜白くなりけるかな
同
- 125 槇の戸のすきもる月の影寒み夜すがら起こす閨の埋火
朝落葉 (61才)
- 126 朝とでに山の下道行く子らがかざす袂にはそ散るなり
同
- 127 雪さそふ外山の峯の朝風に紅葉のみちる秋篠の里
炭竈
- 128 降る雪に松や埋もる炭がまの煙をめぐる夕鳥かな
同
- 129 時雨行く峯の嵐の音はして煙にくる小野の炭がま
同
- 130 朝日影曇ると見しは雪ならでけぶり立つ也峯の炭がま
同 (62才)

- 131 霧
梢吹く風にたくひて池の面の月影くたく玉あられ哉
初雪
- 132 朝風に峯の白雲かつ散りて初雪降り岡の松原
遠山雪
- 133 遠山の高ねの雪や深からし松の一むら風絶えにけり
山家冬
- 134 木のは吹く片山里の冬の夜はいとど淋しき峯の松風
同
「(62ウ)
- 135 冬はな淋しかりけり明け暮れをたど松風にとわれのみして
雪中眺望
- 136 打ちわたす梢ははれて一むらの軒ばの雪に烟り立つ見ゆ
同
- 137 吹きすさぶ風もと絶えてあしのほに入り日かどよふ雪の上かな
水仙花
- 138 我が園の竹の垣根に置く霜をよすがにさける花の色かな
朝落葉
「(63才)
- 139 たつた山時雨に染めし紅葉も散りみだれたる朝ぼらけかな
夜霰
- 140 夜たどふく風のみならで降る音の身にしむものは霰也けり
松上霜
- 141 有明の月の名残を我が門の松にみせたる霜の色哉
同
- 142 朝づく日ほのめく松の一むらにあと見えそめて霜けぶるなり
- 143 山風のさそふ木の葉をせきとめて氷にかくる瀬のしがらみ
河氷
国造殿御賀に送之
「(63ウ)
- 144 とし高くしげれる松に鶴山の千代をあらそふ色は見えけり
此下雑之部ニ出ス
「(64才)
- (以下九丁「65才〜73ウ」本文なし)
雑の部
- 145 夕日さす磯わの嵐吹きたえて管家の煙空に立つ見ゆ
漁村煙
「(64ウ)
- 146 旅衣袂もおもる春雨に蕨や摘まむ山の下道
春旅
同
- 147 此のころの旅にも馴れて花のかの袂にあまる春の山道
冬述懐
- 148 位山ふもとに生ふる草ながらかしの雪は猶つもる也
遠村鶴
「(74才)
- 149 しらみ行く煙の末の松蔭にもるも遠き鶴の声哉
旅泊花
- 150 仮寝せし宿の桜も咲きぬらん枕にかをる明けぼの空
冬旅
- 151 今よりは旅寝の夢もさえぬべく落者衣をたちや重ねん
埋火

152 ひとり守る・閨の埋火小夜更けておく霜白く也にけるかな

「(74ウ)

遠村鶴

153 山かげの松原ごしに里見えて鶴が音遠き朝朗かな

名残に

154 追風(おひて)よく君が舟出と聞くからはひくに引かれぬ千世の友綱

祝

155 若松の二葉よ千世にさかえなん鶴の毛衣たち重ねつゝ

同

156 末遠く豊かにすめる此の宿に千世よばふ也鶴の諸声

「(75オ)

大谷屋老人六十賀に 寄稻祝

157 小山田の晩稲の穂波千代かけてよるともつきぬ君がよはひか

重意居士七めぐりに

158 春の夜の月は昔に霞めどもたゞめの前の俤にして

歳暮

159 にぎほへるとしの市路の夕烟あすは霞に立ちかはらん

前へ出ス

同

160 いたづらに消えさらましき我が宿の雪と心のつもる年かな

「(75ウ)

鶴

161 あまがける田豆(たづ)の行くえは暮れはてぬ星の林に峙しぬらん

寄雪祝

162 とし深き野べの松原千世こめてながめつきせぬ雪の色かな

埋火

163 榎の戸のすきもる月の影さむみ夜すがらおこす閨の埋火

旅

164 けふも猶行く先たどる東路に日数重ぬる旅衣かな

「(76オ)

同

165 雨しげし嵐ははげし草枕はかなき夢もみだれのみして

同

166 古郷をおもふ旅寝の枕邊に聞けばかなしき小男鹿のこえ

鶴

167 もえ出でし澤辺のまこも春めきて霞をたどるたづの声かな

同

168 八千代経てしみさびたてる松が枝や子をおもふ鶴のかざしなるらん

閑居月

169 ひとりすむ庵の軒ばは落者マして木の間あらはに見ゆる月影

「(76ウ)

船上山

170 春されば沖津白浪音絶えて雲井に霞む船上の山

鐘

171 初瀬山嵐の奥の鐘の音に雲もわかれて夜は明けにけり

大宝坊教好ぬし

花月庵君四十の御賀に

172 出雲山しみさびたてる銚杉の直き心に千世もへなゝむ

五月古蔭君のかへり給ふに別れをおしみて

- 173 いまはとて君いそぐとも立花の香をりとゞめよ軒の朝風
「(77才)
- 174 とし高くしげれる松に神山のうごかぬ御世の色は見えけり
松
西行上人患に六百五十回忌に寄花懐旧といふことを
みよしのゝ花の姿も散りはてゝ佛ばかり匂ひぬるかな
同
- 176 はかなくも過ぎしよしのゝ山桜むかしながらにほひぬる哉
重好の母の身まかり給ふに 哀傷
- 177 風さそふみ草の露と消えにけり君がかたみは言葉のみして
「(77ウ)
- 178 夕闇の霞の中に埋もれて思ひ重なる遠方の山
赤
寄山恋
處女らが末つむ花の片岡に紅にほふゆふひかげかな
白
- 180 ふり積もる雪の山田の明けぼのにさか羽みだれて鶯のとぶ見ゆ
橋
- 181 雨はるゝ雲の絶え間にかつ見えて夕日ぞ渡る峯の棧
同
- 182 落ち・滝(たき) つ谷の棧雲立ちて音こそひゞけ山もとゞろに
「(78才)
- 183 明けぬるか薄霧がくれ鴟鳴きて岡邊のくぬ木朝日さす也
馬
百舌鳥
- 184 朝げたく里の杉村声もれていなゝく馬やいづち行くらん
- 185 雨そゝぐ軒の村竹風過ぎて枕に残るかねの音哉
鐘
哀傷
- 186 きえ残るかたみの露の佛はあかつきおきの袖に見えけり
「(78ウ)
- 187 わたつ海はかぎりもなげに見ゆる哉五百重の浪のよせ帰りつゝ
海
黒
- 188 雨につれてさわぐ羽音の山鳥何のさがにや闇に鳴くらむ
百舌鳥
- 189 おしねほす田中の杜に鴟なきて木末の紅者マヤかつ「こ」ぼれつゝ
同
- 190 一むらはまだ夜ごもりに朝げたく煙いぶせき鴟の声かな
「(79才)
- 191 おもひわびねられぬ夜半の月影にくまなき物は涙也けり
寄月恋
重好君玉造に日数あまた旅やどりけるに
草枕露の袂もいつしかに都となるゝ秋も有りなん
名月の曇りを見て
- 192 天津空月以て雪と見る物を雲こそつゝめ大神の山
人の六十賀に春祝
- 193 此の春のちとせをつぐる鶯の初音も長き君が御代かか
「(79ウ)
- 194 門脇 四十之賀に寄松祝
- 195 さかえゆくみぎりの松の千代の色を今年よりこそ君やみるらめ
萩園翁靈遠きに夏懐旧といふ事を

196 夕やみの頃なつかしくおもひ出でてながむる空に飛ぶほたるかな

山家

197 朝夕に折たく柴の薄煙りこゝろ細くもすめる庵哉

同

198 朝夕に雲のみかゝるみ山べの夢や嵐にまかせはつらん

「(80才)

寄月恋

199 おもひ侘び詠め果てても明けにけり袖の露とふあり明の月

暮林帰鳥

200 とまり鶉の帰る林は暮れそめて山ぎはあかき雲の一むら

建比古の六十賀に

201 生ひしげるみぎりの松の若みどり君が千とせの色は見えけり

国造殿御賀に送之

202 とし高くしげれる松に鶴山の千代をあらそふ色は見えけり

「(80ウ)

人の四十賀に

203 うつし植ゑし子の日の小松今年より君と千年の蔭きそふらん

鹿島重正が四十の賀に春祝といふ事を

204 八重霞千重にたなびく春山のすゑはるかにもみゆる君哉

十月町田■翁七めぐり之忌■

205 過ぎし世をしたふ園生の袖垣にたえずしぐるゝ窓の松風

「(81才)

秋懐旧

206 なきたまの行なやいづこ天つ雁鳴く音身にしむ夕暮の空

「(81ウ)

(以下十一丁「82才〜92ウ」本文なし)

嘉永六とせの春

相改

源長行

(裏表紙見返し)

〔和歌 長行 翻刻〕

和歌

長行

立春

1 曙の雲をかける鶴音に千とせの春もひゞきそめつゝ

「(表紙表)
「(表紙裏)
「(遊紙)

2 春きぬとにほふ霞の山眉に朝けのけぶり立ちそめにけり

3 吹きなびく雲の袖より明け初めて四方の山なみ春や立つらん

「(1才)
「(1ウ)
「(2才)
「(2ウ)

若水

4 汲みなれし庭の井筒も春来ぬと今朝若水にあらたまりけり

「(3才)
「(3ウ)

春色浮水

- 5 あつ氷霞のひまにとけしより山下水の音けぶる也
 6 山川に氷流るゝ此の頃の水にも春の色は見えけり
 7 山影のやゝもえ初むる雪間より色萌え出でし若菜摘みてん
 8 心あてにけふは尋ねて雪ながら野ゝ邊の若菜誰かつむらん
 9 山ゝの霞の衣春くれば軒ば放れて若菜つむなり
 10 雲影の花かと思えし山のはの霞もにほふ春の曙
 11 赤星の霞める見れば山眉の花かあらぬか春の曙
 12 海士舟の行くへをしたふ風見えて沖の霞も打ちなびきつゝ
 13 わたつみの沖吹く風も隙見えて霞にしづむ浪の色哉
 14 朝ぼらけ霞の中に鳥が音の聞こゆるかたやいづこ成るらん
 15 いつしかと我が住む山も春めきて長閑にも鳴く鶯のこゑ
 16 長閑にも垣根の梅の香り来て風の行くへに鶯のなく
 17 谷の戸も春は来にけり梅が香に初音をこぼす軒の鶯
 18 花咲ける草の庵はのどげにいまも残れる跡のしら雪
 19 松の戸も此のごろ匂ふ花の香にけたれて残る峰の白雪
 20 朝風に畑やく畑結ぼられ梅が香寒し小山田の里
 21 山田守る庵のみぎりの真柴垣ほに出でて匂ふ梅も有りけり
 22 庭の面の月は朧に照りながら濡るゝを見れば春雨ぞ降る
 23 久かたの雲井にみてる浪の上に名残も霞む雁の声かな
 24 足引の山桜戸の朝なゝ花咲かむ日待つぞ楽しき
 25 打ちわたす峯の横雲いつしかと別るゝ見れば花咲きにけり
 雪中若菜
 残雪
 田家梅
 夜春雨
 帰雁
 待花
 花
 遠山花
 山家鶯
 山家鶯

- 26 白雲の外山の桜咲きぬらん此のころ薰る窓の明けぐれ
隣家花
〔17才〕
- 27 糸桜なびく隣の垣内より風にまかする花の色哉
山家花
〔17ウ〕
- 28 さくら戸に立つや霞を吹き分けて都に送る花の下かせ
〔13才〕
- 29 灌邊花
水上は雲に埋める白灌のいともて結ぶ山桜哉
野邊花
〔23才〕
- 30 嵐吹く木末は花の色消えてつらく薰る旅の袖哉
〔13ウ〕
〔14才〕
〔14ウ〕
- 31 春雨にみどり深むる沢の邊の若草隠れ蛙鳴く也
蛙
〔15才〕
- 32 かきつばた木隠れ茂き一本にゆかりの色の花は咲きけり
燕子花
〔15ウ〕
- 33 立ち並ぶ杉のみ山の夕日影さえゆく春の暮れをしむ也
惜春
〔16才〕
- 34 世に住みし春のゆかりに我が庭の垣根のすみれ花咲きにけり
閑庭堊
〔16ウ〕
- 35 山川の氷流れて朧夜の月にけぶれる青柳のいと
川邊柳
〔16ウ〕
- 36 山吹のやつれがちなる我が庵は春も小てふの夢と暮れにき
三月尽
〔17才〕
- 37 吹きはらふ小ざゝの風に露更けて月の行くへに飛ぶほたるかな
蛩
〔以下五丁〔18才〕22ウ〕本文なし
〔23才〕
- 38 夕立の過ぎ行く小田のあし垣にたゞよふ風も涼しかりけり
田家夏
〔23才〕
- 39 木がくれの山下清水いつしかと夏のひまもる音ぞすゞしき
田上夏月
〔24才〕
- 40 山松のすけきをもるゝ月影に早田の水も秋の色せり
〔23ウ〕
〔24才〕
〔24ウ〕
- 41 小雨降る野河の岸の夕まぐれ水草隠れに水鶏鳴く也
水鶏
〔24才〕
- 42 雨さそふ軒の松風たゆむまも水鶏鳴く夜はえこそねられね
〔24ウ〕
- 43 草の戸はもる月影もいつしかと更け行くかたに水鶏鳴く也
〔25才〕
- 44 窓近く水鶏鳴く夜の月影にわが隠れ家も戸ざしかねつゝ
〔25ウ〕
- 45 ぬぎかへる花の衣の名残まで残るばかりに夏は来にけり
早夏
〔25才〕
- 46 明け渡す磯山松に散る浪の薄雲かゝる夏は来にけり
〔26才〕

早苗露

47 植ゑはてし小田の早苗を見るが内にみどりの露ぞ吹き渡しけり

「(27才)

「(27ウ)

卯花

48 朝ぼらけ一むら白き道とへば賤が垣根のうつき也けり

49 夕まぐれ若ばの奥に一むらの雪かと見えてうつき咲きけり

「(28才)

「(28ウ)

五月雨

50 雲かゝる岡の松原風絶えて日かげもゆるく五月雨ぞ降る

雲(以下本文なし)

「(29才)

五月雨晴

51 うき雲の絶え間も見へて五月雨の晴れ行くかたにけぶり立つなり

52 うき雲はやゝうすらぎて「山のはの」嵐にはるゝ五月雨の空

「(29ウ)

稲妻

53 我が門の浅茅が露のたま／＼に宿るもはかな稲妻の影

54 稲妻のあたりやいづこむぐらふの葉末の露の光をぞみる

55 かの見ゆるは山が末は昏れ初めてこゝろゆかしき稲妻の影

「(30才)

「(30ウ)

夏月

56 薄衣涼しき月の影さしてしばし戸ざゝぬ夏の夜は哉

「(31才)

月前時鳥

57 月いづる山松影は雲もなくしのび音高きほとゝぎす哉

「(31ウ)

暁郭公

58 ほととぎす今一声はいづかたの月にのこせし有明の空

「(32才)

月前納涼

59 夕闇は風にうすれし山のはにほのめく月の影ぞすゞしき

「(32ウ)

(以下十一丁「33才」43ウ」本文なし)

初秋月

60 西空にほのめき渡る三日月のあらわれそめて秋や立つらん

61 山の邊の松のは越しの薄霧に秋めきわたる三日月のかけ

月前管絃

62 糸竹の声のひゞきに雲はれて影おもしろき秋の夜月

鹿声何方

63 山深み霧立つ奥の夕ぐれに立ちど定めぬ小男鹿のこゑ

「(44才)

「(44ウ)

残暑

64 夕川の早瀬も夏はよどむらしまだあつき日の影は見えけり

65 桐の葉はおのれと散れど夕日影さすがにあつき庭の真砂地

「(45才)

萩

66 秋萩の花の中道分け入れば袂にはほふ露の色かな

67 小山田のきしの萩原風過ぎて月影ながら露ぞみだるゝ

68 月更くる片山影は露ちりてきしの萩〔以下本文欠〕

霧中鹿声

69 露深き山田のひたのひたすらに哀れをこめて小鹿鳴く也

「(45ウ)

蔦

70 雨晴れし軒端の松に音絶えて夕日に溢す蔦紅者哉

月

71 うき雲は松の木末に晴れにけりのどかに月の入るかたや見む

きりぐす

72 物おもふ霜夜の窓に月更けて身にしむ斗(ほかり)なくきりぐす

「(46オ)

きりぐす

73 きりぐす鳴く音さびしき夕暮に小野々笹原小雨ふる也

擣衣

74 紅葉ちる片山影は霧こめて誰が里なれや衣うつこゑ

75 小夜更けて袖しぼれとや聞寒き枕の山に衣うつらん

「(46ウ)

雨中聞擣衣

76 手弱女ツヤが打つや砧の音す也雨のこゑさへ絶えぐにして

菊露

77 きふけふ垣内に咲ける白ぎくの匂ひも深き露の色哉

78 朝戸出の垣根に咲ける菊の花手折れば袖に露やこぼれん

「(47オ)

同

79 露結ぶ籬の菊の花の色をやつしもはてぬ庭のまり垣

虫 高階ニテ

80 夕月は梢に晴れて草村の露よりしげき虫の声ぐ

「(47ウ)

卯

八月十五夜於実成寺御歌会ニ

月

81 雨はや々梢の露を残し置きて月はれ渡るけふにも有りけり

雨中雁

82 村雨をつばさにかけて雁がねの声もはるけき朝ぼらけ哉

同

83 浮雲を分け行く雁の翅より折ぐそぐ雨の音かな

「(48オ)

同

84 雨雲をつばさにかけて飛ぶ雁の声もしぐるゝ朝ぼらけ哉

同

85 村雨の音さへ寒き明け方の雲まにまよふ初雁のこへ

庭菊

86 初霜はおかばをかなん庭の菊秋の咲りは詠めつくしぬ

「(48ウ)

山家紅者^{ママ}

87 分けまよふ山ふところの紅葉がり鹿のふしどに宿やもとめん

暮秋

88 浅茅生の露斗^(ばかり)なる虫の音もかれぐにこそ秋更けにけり^{ママ}

田上霧

89 かきつ田の稲ばのほのへ霧こめてるせきの水の音むせぶ也

「(49才)

月下独釣

90 川波に月の桂の流れてもさわらで垂るる釣のいと哉^{ママ}

秋日田家

91 夕日さす垣内の雀むれ立ちぬふせ庵の鳴子今か引くらん

「(49ウ)

(以下十五丁「50才」64ウ」本文なし)

冬部

92 神無月時雨^{ママ}ごとに散る見えて風に先だつ木々の紅葉^{ママ}

冬遠晴

93 夢にだにまだ見ぬ不二の雪の上に聞もる月は今か照るらん

冬田

94 冬されば見るめも寒き小山田のひつちは霜に結ぼられつゝ

「(65才)

海上雪

95 明石がた浪のうねくこぐ舟の詠めも深き雪の曙

船中霰

96 漕ぎ下す淀川舟の笛ごしに月かげながら霰降る也

雪

97 水枯れしはや川の瀬をさし下す筏の上に雪は降りつゝ

「(65ウ)

同

98 はへ渡る雲間の月を思ひ寝の枕につもる夜半の雪哉^{ママ}

霰

99 山風に霰たばしる此の頃は鳥の鳴く音もくだけのみして

同

100 山風に降る音しげき玉霰たまれば消ゆる谷川の水

「(66才)

初雪

101 さえし夜の峯の松風明けぬめり木々の白雪けさは見ゆ蘭

橋上霜

102 ゆふ月の霜の上なる雲かげに渡るも寒き山川の橋

「(66ウ)

海邊雪

103 降りわたす磯べの松の白雪に浪もこもる心地こそすれ^{ママ}

落者^{ママ}

104 雨雲の夕日に染めし色消えてひとりこぼる薄紅者哉^{ママ}

山家冬

105 山里は落者の音も小夜更けて月より外にとふ嵐哉^{ママ}

「(67才)

- 106 吹き越ゆる風を時じみ山里の夢の枕に木のは降る也
冬月
山家落者^{ママ}
- 107 我が門の木々の梢は落者^{ママ}して見る影寒し冬の夜月^{ママ}
落葉
- 108 人しらぬ遠山影の薄月夜風に交りて木のは散るらん
時雨
「(67ウ)
- 109 我が門の川邊の柳散りはてゝひとり過ぎ行く夕しぐれ哉
時雨落者^{ママ}
霰
- 110 小ざゝ原山風ならで降る音の身にしむものは霰なりけり
同
- 111 梢吹く風にたぐひて池の面の月影くたく玉あられ哉
夜霰
「(68オ)
- 112 夜たゞふく風のみならで降る音の身にしむものは霰也けり
竹雪
- 113 打ちなびく風の姿もあらはれて雪におきふす軒の村竹
海辺雪
- 114 浦風は吹けどふかねど塩竈の烟の上に雪は降りつゝ
冬田
「(68ウ)
- 115 刈り残す山田の稲葉風見へて影さへ渡る冬夜月^{ママ}
磯千鳥
- 116 風荒き磯の笹家の夕煙みだるゝかたに千鳥鳴く也
遠山雪
- 117 けさみれば遠山かづら花ならで木々の姿に雪ふりにけり
同
「(69オ)
- 118 降り積もる高ねの雪の静けさに替の松も音せざりけり
山雪
- 119 帯にせる細谷川の音絶えてみ雪降る也吉備の中山
月前霰
- 120 月にちる影もくだけて石川の早瀬にひゞく玉あられ哉
鷹狩
「(69ウ)
- 121 雪晴るる松の木の間に見えにけり今朝の狩場の鳥の落草
同
- 122 村時雨過ぎ行く野べの狩衣ぬれし袂に夕日さす也
山家時雨
- 123 松風の時雨にさわぐ冬の夜は寢覚めのみして明けはてにけり
海上雪
「(70オ)
- 124 和田の原漕ぎ出でし舟も見るが内に帆かげかくれて雪になりつゝ
初雪
「(70ウ)
- 125 朝ぼらけ雲の上なる大神の嵐の末に初雪ぞ降る
同

126 朝風に峯の白雲かつ散りて初雪降り岡の松原

「(71才)

遠山雪

127 遠山の高ねの雪や深からし松の一むら風絶えにけり

山家冬

128 木のは吹く片山里の冬夜はいとゞ淋しき峯の松風

同

129 冬はなを淋しかり 梟(けり) 明け暮れをたゞ松風にとわれのみして

「(71ウ)

遠山雪

130 白雲も立ちはなれたる遠方の高ねの雪に朝日さす也

埋火

131 いつしかと霜に成り行く埋火に炭さしほどはしばし寒けし

同

132 ひとり守る閨の埋火小夜更けて置く霜白くなりける哉

「(72才)

朝落者ママ

133 朝とでに山の下道行く子らがかざす袂にはそ散る也

同

134 雪さそふ外山の峯の朝風に紅葉のみちる秋篠の里

同

135 たつた山時雨に染めし紅葉も散りみだれたる朝ぼらけ哉

「(72ウ)

136 降る雪に松や埋もるゝ炭がまの煙をめぐる夕鳥哉

同

137 時雨行く峯の嵐の音はして煙にくるゝ小野の炭がま

同

138 朝日影曇ると見しは雪ならでけぶり立つ也峯の炭がま

「(73才)

雪中眺望

139 打ちわたす梢ははれて一むらの軒ばの雪に煙立つ見ゆ

同

140 吹きすさぶ風もと絶えてあしのほに入り日かゞよふ雪の上哉

水仙花

141 我が園の竹の垣根に置く霜をよすがにさける花の色哉

「(73ウ)

松上霜

142 有明の月の名残を我が門の松にみせたる霜の色哉

同

143 朝づく日ほのめく松の一むらに跡見えそめて霜けぶる也

河水

144 山風のさそふ木のはをせきとめて氷にかくる瀬のしがらみ

「(74才)

(以下五丁〔75才〜79ウ〕本文なし)

雑の部

春旅

145 旅衣袂もおもる春雨に蕨や摘まむ山の下道

冬旅

- 146 今よりは旅寝の夢もさへぬべく落者衣を立ちや重ねん
旅
- 147 雨しげし嵐ははげし草枕はかなき夢もみだれのみして
遠村鶴
「(80才)
- 148 山影の松原ごしに里見へて鶴が音遠き朝ぼらけ哉
名残に
- 149 追風よく君が舟出と聞くからはひくに引かれぬ千代の友綱
祝
「(80ウ)
- 150 若松の二葉よ千世にさかへなん鶴の毛衣たち重ねつゝ
同
「(81才)
- 151 末遠く豊かにすめる此の宿に千世よばふなり鶴の諸声
大谷屋老人六十賀に寄稲祝
- 152 小山田の晩稲の穂波千代かけてよるともつきぬ君がよはひか
重意居士七めぐりに
- 153 春の夜の月は昔に霞めどもたゞめの前の俤にして
寄雪祝
「(81才)
- 154 とし深き野べの松原千世こめて詠めつきせぬ雪の色哉
鶴
- 155 八千代経てしみさびたてる松が枝や子をおもふ鶴のかざしなるらん
船上山
- 156 春されば沖津白浪音絶えて雲に霞む船上の山
- 157 初瀬山嵐の奥の鐘の音に雲もわかれて夜は明けにけり
鐘
「(81ウ)
- 158 雨はるゝ雲の絶え間にかつみえて夕日ぞ渡る峯の棧
橋
同
- 159 落ち滝つ谷の棧雲立ちて音こそひゞけ山もどぶろに
山家
「(82才)
- 160 朝夕に折たく柴の薄煙こゝろ細くもすめる庵哉
同
- 161 朝夕に雲のみかゝるみ山への夢や嵐にまかせはつらん
寄山恋
- 162 夕闇の霞の中に埋もれて思ひ重なる遠方の山
寄月恋
「(82ウ)
- 163 おもひ侘び詠め果てゝも明けにけり袖の露とふ有明の月
百舌鳥
- 164 明けぬるか薄霧がくれ鴟鳴きて岡邊のくぬ木朝日さす也
同
- 165 おしねほす田中の杜に鴟鳴きて木末の紅者かつこぼれつゝ
「(83才)
- 166 一むらはまだ夜ごもりに朝げたく煙いぶせき鴟の声哉
馬
- 167 朝げたく里の杉村声もれていなゝく馬やいづち行くらん
白

168 降り積もる雪の山田の明けぼのにさか羽みだれて鷺の飛ぶ見ゆ
「(83ウ)

赤

169 處^マめらが末つむ花の片岡に紅匂ふ夕日影かな

黒

170 雨につれてさわぐ羽音の山鳥何のさがにや闇に鳴くらん

海

171 わたつ海はかぎりもなげに見ゆる哉五百重の浪のよせ帰りつゝ
「(84オ)

硯

172 吹く風を窓に隔てて文机の硯の海は立つ浪もなし

「(84ウ)

(以下十二丁「八五オ〜九六ウ」本文なし)

(裏表紙見返し)

【『和歌雑集』 翻刻付記】

1 歌 三句底本「啼鶴」 「啼鶴の」か。 四句底本「声にとゝなふ」 「声
にととのふ」か。

27 歌 三句底本「鶴音に」 「鶴が音に」か。

38 歌 五句底本「吹渡しけり」 「吹渡しける」か。

47 歌 五句底本「葛紅者かな」 以下、本書では「紅葉」を「紅者」と表
記する例が多く見られる。

54 歌 五句底本「庭のまり垣」 「庭のませ垣」の誤りか。

66 歌 四句底本「秋の咲りは」 「秋の盛りは」か。

68 歌 五句底本「秋更にけり」 「秋更にけれ」か。

70 歌 二句底本「時雨とごとくに」 「しぐるとごとくに」と読むか。 五句底
本「木々の紅葉」 「木々の紅葉」の誤りか。

75 歌 二句底本「はや瀬を」 傍記により語句の挿入を指示。

81 歌 四句底本「浪もこもる」 「浪もこぼる」か。

82 歌 題底本「落者」 以下、本書では「落葉」を「落者」と表記する例
が多く見られる。

90 歌 底本では二行書きにした和歌本文の間に「先に有」の注記があるが、
本書の冬部に131歌「梢吹風にたぐひて池の面の月影くたく玉あられ哉」
のよく似た歌がある。

94 歌 四句底本「影さへ渡る」 「影さえ渡る」か。

101 歌 三句底本「静さに」 朱傍記により文字の挿入を指示。

135 歌 五句底本「とわれのみして」 「とはれのみして」か。

144 歌 歌の左の注記に「此下雑之部に出ス」とあるが、本書の雑部の202歌

が同題の同歌である。

159 歌 歌の左の注記に「前へ出ス」とあるが、何を指すか不詳。

160 歌 二句底本「消さらましき」 「消さるましき」の誤りか。

186 歌 三句底本「佛は」 左に「や」とあり、傍記により「佛や」と指示
しようとしたが抹消したか。

189 歌 五句底本「かつほれつゝ」 傍記により文字の挿入を指示。

【『和歌 長行』 翻刻付記】

1 歌 五句底本「鶴音に」 「鶴が音に」か。

47 歌 五句底本「吹渡しけり」 「吹渡しける」か。

68 歌 底本では「月更る片山影は露ちりてきしの萩(以下本文欠)」となっ
ているが、安政四年成立の『採風集二編料』79歌「月更る片山影は露
ちりてきしの萩原風そよぐ也」と同歌と思われる。

- 79 歌 五句底本「庭のまり垣」 「庭のませ垣」の誤りか。
- 86 歌 四句底本「秋の咲りは」 「秋の盛りは」か。
- 87 歌 題底本「山家紅者」 以下、本書では「紅葉」を「紅者」と表記する例が多く見られる。
- 88 歌 五句底本「秋更にけり」 「秋更にけれ」か。
- 92 歌 二句底本「時雨ゝごとに」 「しぐるゝごとに」と読むか。五句底本「木ゝの紅葉」 「木ゝの紅葉ゝ」の誤りか。
- 98 歌 初句底本「はへ渡る」 「はえ渡る」か。
- 103 歌 四句底本「浪もこもるゝ」 「浪もこぼるゝ」か。
- 104 歌 題底本「落者」 以下、本書では「落葉」を「落者」と表記する例が多く見られる。
- 109 歌 次の行に底本では「晴雨落者」と題に抹消線が付され歌がないが、『和歌雑集』の89歌「時雨落葉 雲晴る時雨の跡をきてみれば片山里に木のは降也」が該当するか。
- 131 歌 四句底本「炭さしほどは」 「炭さすほどは」か。
- 169 歌 初句底本「處めらが」 「處女らが」か。

* 原稿受理 令和三年一月十五日
 ** 教養教育部門